

## ケアタウン構想検討委員会（第1回）市長挨拶

皆様、改めまして、こんにちは。

今日は、第1回のケアタウン構想検討委員会に、日曜日の何かとお忙しい中、ご参集いただきまして誠にありがとうございます。

また、ただいま、委員の皆様のご委嘱をさせていただきましたが、公務や私用で何かとお忙しい中、快くお引き受けいただき、改めて感謝申し上げます。

私も、昨年の5月に市長に就任し早1年が経過いたしました。新しい小田原の市政の3本柱の1つに掲げさせていただいた『いのちを大切にする小田原へ』を実現させるためのケアタウン構想にける思いを聞いていただきたいと思います。

私は、両親を早くに亡くしたということもあり、また長女が病気を患ったりしたということもあり、命というものを本当に深く考えることが多い人生でありました。さらに、長女の病気の結果として、少し軽いものでありますが障害を持ったということもあり、同じような境遇に置かれた保護者の方たちやそれらを支えていく方たちと関わるが多かったのですが、このような方々と触れていく中で、現在の日本の地方都市において社会的にケアを必要としている方々の置かれた状況を目の当たりにし、このままでいいのかという思いに至りました。

自分の娘の障害を例に挙げて話をしましたが、ご承知のとおり、高齢化社会がものすごい勢いで進展し、自治体の財政の民生費（社会福祉関連の費用）が待ったなしで右肩上がりに増え続けている一方で、それを支えていくべき地域のさまざまな資源となるコミュニティにおいても段々とその受け皿としての機能が弱まってきており、これまでそういった方たちを支える第一の砦であった家庭というものの形も、どんどん変わってきています。

そういう中で、誰がこの社会のこれからますます膨らんでいく福祉、医療、教育といった分野を支えていくのか、非常に大きな懸念をもって一市民として感じてきました。そのため、今回市長に就任させていただいて、そのテーマに『いのちを大切にする小田原へ』を掲げさせていただきました。

私も就任前に、福祉の先進地と呼ばれる北欧の方に勉強に訪れ、いわゆる「高負担・高福祉」の現場の状況を見てまいりましたが、この日本の現状を解決するためにあれだけの負担をするということは、社会的にもなかなか難しいと思います。また、「高負担・高福祉」は、制度的には大変すばらしいものですが、一方で非常にドライな関係の中で福祉の問題を解決する仕組みでもあると率直に感じました。

日本は、「目上の方を目下の者が敬う」、「親を大切にする」、「近所の中で高齢者を助け大切にする」という美風が文化としてあります。また、隣近所はお互い様で支え合うという歴史的な風土があり、「困ったときはお互い様」という日本ならではのウェットな関係の延長線上に福祉の支え合いの仕組みができるのではないかと感じ、その仮説を自分なりに考

えてきました。その間、いろいろな方にご指導をいただき、日本の福祉の中でとりわけ地域福祉モデルとして先進的な取り組みをしている団体や民間事業者たちに触れさせてもらいました。また、行政が先進的に仕組みづくりにチャレンジしているところもあることも分かりました。

そのような情報を断片的に得られましたが、「じゃあ小田原では何ができるか」を具体的に考えていかなければなりません。国策が「低福祉・低医療」の予算編成で来ており、現状を救えるような地域の仕組みになっていません。だからといって、国策が追いついてくるのを待っているわけにはいかず、地域でできることは地域の中でやっぴいこうと一歩踏み込んでやるべき時に来ております。

幸いにも、小田原の場合は、自治会は非常に熱心であり、地区社協も根強い活動を丹念にされており、民児協も頭の下がるようなご努力をされている。PTA、子ども会、市民活動等、活動の存在の数としてはたくさんあるが、これから先はこれらの団体が一つになって、縦割りを超えて地域の中でお互いが貴重な資源を融通し、支え合っていくことができるだろうと考えております。

「ケアタウン」という言葉自体は、福祉の先進地として脚光を浴びた秋田県の旧・鷹巣町にできた「ケアタウンたかのす」という施設や、一度訪れた東京都小平市の「ケアタウン小平」という施設の名称のイメージが頭の中に残っており、また、現在「潤生園」さんではコミュニティケアという取り組みをされていますが、「地域トータルでケアしていくまち」という意味で「ケアタウン」という名称を暫定的に用いてきました。つまり、地域の中でそれぞれの立場や置かれた状況をお互いが共有し、手を出して支え合っぴいこうとする仕組みや風土・精神を持った地域をつくっぴいこうという思いであります。

今回は、今年度3月末までの非常に短い時間設定ですが、全6回の会議の中で、平成23年度からに本格的にスタートします新しい総合計画に盛り込んでいく“小田原の福祉の型”を皆さんに縦横にご議論していただきたい。

今回は、専門の先生として田園調布学園大学人間福祉学科の教授でいらっしゃいます伊東先生、さらにこの3月末まで厚生労働省にお勤めになっておられました中村美安子先生にも参画いただいております。また、自治会、民児協、市社協、地域の様々な団体の皆さんにも参画いただいております。そして、大変熱心な市民の皆様に公募枠に応じていただき、3名を選出させていただきました。いずれの皆さんも、熱意と経験と情報を豊富に持っている方ばかりですので、堅苦しい検討委員会という形式ではありますけれど、堅苦しい雰囲気にとらわれず活発に議論していただき、社会的に救いが必要な方たちをどう支えるかという、まさに命にかかったテーマですので、遠慮なさらずに忌憚ないご意見をぶつけていただき、建設的に進めていただきたいと思います。私も今日は最後まで同席をさせていただきますまして、皆さんの議論に参加させていただきます。また、今後も議論の様子を順次報告を受け、必要に応じて議論に交じり共に考えていきたいと思っております。

今回のケアタウン構想検討委員会が、実りのある会議となりますよう、そして、何か次

に続く具体的なアクションへの前向きな提案が生み出されることを強く期待申し上げまして、私の挨拶とさせていただきます。皆様よろしくお願いたします。